

OPAC 評価の実際（若干のまとめ）

渡邊隆弘（帝塚山学院大学）

レポート課題「WebOPAC の評価と改善提案」

勤務館もしくは適当な館の OPAC について、検索機能・表示機能・ヘルプ機能等の評価を行い、改善点を考えてください。

- ・全体的でも、特定の問題を突っ込んで論じていただいても可
- ・近隣図書館・同規模図書館・都道府県立図書館・NDL-OPAC 等のシステムも参考にし、相対的に論じていただけるとなお可
- ・話が細かくなっても、現実的な問題を考えるのが常道かと思います（例年の提出分を拝見しても）。一方で、現状ではどうしようもなさそうな「夢」を語ってもらってもかまいません。ただその際は、何がどうなっているのか、をできる限り考えてみてください。
- ・Web 版 OPAC のない図書館の方は適当な館を素材としてください。また、特別な問題意識があれば、あえて勤務館以外を対象としていただいても可。

・今回取り上げられたシステム

富士通 iLiswing (5)、日本電気 Lics-web (2)、三菱 MELIL、NTT データ Nalis、
日本電子計算 LUNUS、京セラ丸善 ELCIELQ、日立 LOOKS21、ハザン商会 LX

・研修は皆さんのレポート（発表）を中心に

以下は、参考資料としての「まとめ」

OPAC に求められる機能

検索の目的と目録の機能

- ・「既知の資料」を探すための目録（ファインディングリスト）
 - 特定の資料がすばやく探せる
 - あいまいな情報からでも探せる
 - 同定識別と利用可能性の判断が確実にできる検索結果
- ・「未知の資料」を探すための目録
 - 特定キーワード（主題や著者）に合致する資料を「集中」
 - ブラウジング機能も重要
 - より望ましいものを選択できる検索結果

データベースの基本的な機能

かつては難しかったことが、Web-OPAC では当たり前の実現

- ・空間的制約の打破（どこからでもアクセス）
- ・特殊な機器・環境は不要（PC さえあれば）
- ・時間的制約の打破（24 時間稼働）

OPAC で全蔵書をカバー

- ・都道府県立レベルでも遡及入力は急速に進展
(大学図書館ではいまだに大きな問題)
- ・今後の課題は多文化サービスか

データの更新頻度

- ・即時更新(「貸出中」等のステータス情報も含めて)が当たり前

検索の応答速度

- ・データベース技術の進歩
ヒット件数の多寡に関わらず、高速に検索集合作成
(ただし、一覧表示の応答速度は表示件数に依存)
ヒット件数と「最初の10件」なら高速に提供可能のはず
- ・インターネット検索エンジンの応答速度
遅いシステムは、従来以上に「目立つ」
特に、ヒット件数に比例して遅くなるシステムは問題

基本機能はかなりの割合でクリア

検索・表示そのものが問題に

検索語入力画面のインターフェース

検索対象の限定

- ・図書、雑誌、AV、その他
- ・図書検索と雑誌検索
分けて扱う傾向が強かった 最近はそうでもない
統合的に検索できて当然
(年鑑、白書、統計... 自明に分割できるものではない)
デフォルトは「全資料対象」であるべき
- ・AV、電子資料等をどこまで細かく媒体区分するか?
- ・地域資料等の取扱い
特別な資料群はそれのみに限定して検索可能とするべき
- ・所蔵館(分館)単位で絞り込める機能は必須
必要に応じて、配架場所での絞り込みも
- ・その他、キーワードとの組み合わせで絞り込む機能
出版年、言語...
- ・キーワードを入力せずに全資料一覧
一般図書には不要だが、媒体区分を細かくするなら意味がある
(どんなものかのイメージをつかんで、必要に応じて検索)

検索語入力フィールドの設計

A.対象項目ごとに枠設定

「何から検索できるか」がマウス操作なしにわかる

画面の肥大化、利用者への圧迫感

全項目を横断的に検索する機能を持たせにくい

B.対象項目をプルダウンメニューに(ふつうは複数枠を設定)

入力枠を減らしてコンパクトに

内容の同じプルダウンが複数あるわかりにくさ

C.簡易検索では全項目対象とし、枠は一つ

ひたすらシンプル

- ・大学図書館ではC.(簡易検索)+B.(詳細検索)が主流

空白で区切ると論理積(AND)

検索エンジンとの親和性(Google ライク)

図書館トップページに置くのも一般的

- ・公共と大学の設計思想の違い?

「何から検索できるか」を利用者に伝える役割?

ヘルプの役割では?

- ・簡易検索画面、トップページへの配置

徐々に増えてきている

落とし穴: 「Google ライク」に動作しないシステム仕様では誤解の恐れが

検索対象項目と論理積の取扱い

- ・詳細検索画面の設計

項目ごとの枠設定かプルダウンか?

すべての対象項目を画面に示す必要はない

限定して意味のある項目 + 「全項目」

例えば「注記」・・・注記だけに限定して意味があるか?

- ・「タイトル」と「著者」の範囲

「タイトルと責任表示に関する事項」(+著者標目)以外の取り扱い

シリーズ、内容細目、目次情報

一致条件と論理演算

- ・「前方」「中間(部分)」「後方」「完全」

デフォルトは「中間一致」でよいのでは(前方一致の例を見かけるが)

- ・論理演算(AND, OR, NOT)

それほど使われるものではないが、詳細検索画面では備えたほうが

方式はさまざま: 複数入力時の扱い(ANDかORか)を選択

行ごと、枠ごとの関係を選択

演算子で入力式

提供するなら、ある程度の柔軟性

基本は、(A or B or ...) and (X or Y or ...)ではないか

例) 地震の際のストレス

まず、「地震」「ストレス」のANDを想起

それぞれに、ORのバリエーション(「震災」や「PTSD」)を

これができないと、有効性は減衰

中途半端に枠を設けるよりは、演算子入力でよいかも

キーワード検索の諸相

かつては、書誌記述とは別に「検索キーワード」を別途入力して検索に供していた

数に制限、長さに制限、使える文字種に制限...

その後、書誌記述中の検索対象フィールドからキーワード自動切り出し

空白等を区切りとみなして切り出し

分かち書きされたヨミからは単語ごとに切り出されるが、

分かちのない表記形からは全体形しか切り出されない

今では、検索対象フィールドに対して、「全文検索」手法

「タイトル」: タイトル中のどこかにその語があればひっかかる

全文検索の2方式

・形態素解析法

辞書と照らし合わせて単語に分割し、キーワードとして格納

例)「図書館の学校」 「図書館」「の」「学校」

(「の」は無意味単語として無視することも)

長所:「意味」に沿った手法

短所:分かち書きを利用者に強制

最近は複合語でも探せるよう処理することが多い

例)「画像情報処理法」 「画像」「情報」「処理法」

「画像」「情報」「処理法」「画像情報」「情報処理法」「画像情報処理法」

さらに自動的に前方一致:「情報処理」でもヒット

システムの辞書に依存

固有名詞、古い当て字、自然でないカナ表記、などが苦手

・N-グラム法

決まった字数に分割し、順次キーワードとして格納

例)「図書館の学校」 「図書」「書館」「館の」「の学」「学校」

利用者の入力した検索語にも同様の分割を行う

単純かつ完全な「中間一致検索」が実現

長所:機械的(間違いの発生する余地がない)

短所:機械的(「京都」で検索すると「東京都」もヒット)

・一長一短があるが、N-グラム方式が主流になりつつある。

キーワードの「正規化」

- ・意味のない違いを意識せず検索できるように
 - カタカナとひらがな、大文字と小文字、記号類の無視、旧漢字と新漢字
- ・検索時に(のみ)対処するのは非効率
 - Cat or CAT or cat or cAT or CaT or ...
 - 索引時(データベース格納時)に、どちらかに強制変換
- ・一昔前のシステムのほうが、むしろ「常識」?
 - 「全文検索」になって、「表示用データ」=「検索用データ」の感覚
- ・カタカナ・ひらがな、大文字・小文字、記号類は、できて当たり前
 - 清音・濁音 やらないほうがよいのでは(ノイズが多すぎる)
 - 長音記号 難しい問題
 - 異体字 やるべきだが、文字種も多く関係複雑
 - 例) NACSIS WebCat
 - 日本語・中国語を視野に入れて「漢字統合インデクス」
- ・「ヨミ検索」の位置づけは、今後再検討が必要かも
 - もともと、カード目録・冊子目録の「排列」のために「標目はヨミ形で」
 - OPACでももちろん一定の意味
 - 漢字かな混じりの入力は大変
 - 再現率の向上(表記形は文字種や字体などにゆれ)
 - しかし現在では
 - コンピュータリテラシーの向上(ワープロ入力は自然なこと)
 - 再現率の低下?(ヨミの付与されていない項目も検索対象となる場合)
 - 利用者をどう誘導するべきか?

より高度な検索機能

主題検索のサポート

- ・同義語辞書
 - 辞書の信頼性が鍵 多くは企業秘密でブラックボックス
 - 更新できるべき(地域特有の語など)
- ・分類表の利用
 - 広まっているが、十分使えるものになっているかは疑問
 - 視覚的アクセス、分類表の名辞と索引語、...
- ・件名標目表の利用
 - あまり広まっていない

内容情報の増強

- ・内容細目、内容紹介、帯情報等
 - 急速に広まり、検索対象フィールドにもなっている
 - 検索精度への影響はどうか

表示機能とナビゲーション

一覧表示とソート

- ・一覧表示に求められるもの
 - 既知資料の検索
 - それほど重要ではない(それほどヒット件数は多くないはず)
 - 未知資料の検索
 - 一覧表示から目指す資料を選択する必要
 - ある程度の情報量と一覧性がともに必要
- ・一覧表示の限られたスペースに何を出すのか
 - 表形式か連結式か
 - 「最初の著者だけ」仕様がけっこうある 「ほか」と出したほうが...
 - タイトル関連情報、シリーズ名をどうするか
 - 入手可能性(在架かどうか)もある程度わかるとよい
- ・ソート機能は案外充実(大学図書館よりも?)
 - 検索画面での選択でもよいが、一覧表示段階で切り替えられるとなおよい
 - 検索エンジンのような「ランキング表示」の可能性
 - 大規模蔵書の場合、内容情報が充実してきた場合
- ・一覧表示の一画面出力件数
 - 相当の件数を一覧していくことが(絞り込み検索より)有効な場合も
 - 初期設定は10~20件でも、100件程度までは拡張できるとよい
 - 検索画面での選択でもよいが、一覧表示段階で切り替えられるとなおよい
- ・入力された検索語
 - 一覧画面で表示したほうがよい(誤りなどもわかる)
 - ノーヒットの時すら表示しないシステムも
- ・絞り込み検索
 - 一覧画面でできるとよい
 - できなくとも、入力状態を保持した検索画面へ戻れるように

書誌情報の詳細表示

- ・必要最小限の項目 vs. 全部出す
 - 絞り込みすぎの感のあるシステムも
 - ブラックボックス(なぜヒットしたのかわからない) 無用の不安感
 - 検索対象とするなら、詳細表示に出すべき
- ・ハイライト表示
 - 広まっていないが、有用性は非常に大きい
 - (特に、内容紹介など検索対象項目が拡張された場合)
 - インターネット検索エンジンと対比して

ナビゲーションのための配慮

- ・画面の統一性
- ・そこに至る経緯を表示すべき
何で検索してそこへ到達したのか
- ・検索履歴の再利用(どれだけ有効性があるか)
- ・ハイパーリンクの有効活用
著者や件名をクリックすると当該の一覧表示に
ある程度広まってきた
典拠コントロールとの関係
著者名典拠がどこまで管理されているか

雑誌検索のナビゲーション

- ・大学図書館ではほぼ統一: 『学術雑誌総合目録』の伝統
検索 書誌情報(雑誌タイトル単位) 包括所蔵(例: 1-3,6-13+)
物理単位(新着巻号、製本情報)
- ・公共図書館ではまちまち
いきなり物理単位でなく、雑誌タイトル単位を介すべきでは?
(物品としての管理に傾斜しすぎ)

ヘルプ機能など

ちゃんと書くべき

- 「ヘルプなしで使えるシステムが理想」「そんなに読んでくれない」は正しいが...
それでもきちんと書くのが提供者の責任
カスタマイズしたのにヘルプはもとのまま...(論外)

絶対に、司書が書くべき

- メーカーに「わかりやすいヘルプ」を要求しても無理
随時書き換えられる仕様を要求
新しいシステムに対して、動く前に完璧なヘルプは書けない

用語の使いかた・説明のしかた

- 本当に難しい・・・
多少長くなっても、例示を入れるべきでは

ヘルプの単位

- ピンポイントで示せ、かつ通読もできるのが望ましい

画面上の言葉づかい

- 細かい言葉も意外に大事
「著者」「キーワード」... (明快な解は難しいことも多い)
ヘルプを自分で書いてみると、問題点がわかるのでは